撮影　小泉義彦

緑爽会報　NO. 103
'11年11月25日
発　行
(社)日本山岳会緑爽会
TEL　03-3261-4433
事務局
松本恒廣　樋口公臣
夏原寿一
近藤　緑　川口章子
横山　隆　渡部温子

［一一月例会］

対談・井上靖『氷壁』とその時代

一一月一九日（土）、あいにくの雨天にもかかわらず、予定した午後一時半には会場に用意した椅子が満席となった。

講師に迎えた石原國利さんは、昭和三〇年に起きたナイロンザイル切断事件の当事者で、それを基にした小説では主人公魚津恭太のモデルとされた人。福岡から所用で上京される機会を待って話していただくことが出来た。対談のお相手は、当時中央公論社で井上靖の担当だった近藤信行氏。安全とされたナイロンザイルの事故とその後の強度実験をめぐっては、日本山岳会も大揺れに揺れた。その頃を知る人も少なくなった。今回『氷壁』を手掛かりに山岳史のひとこまを学習できたのではないか。井上靖の出身地静岡支部の会員からは蜜柑が届き、終了後に設けた懇親会では楽しく飲んで散会した。参加者　計五〇名。

［緑爽会忘年会］

［と　き］　12月13日（火）13：00～15：30

［ところ］　日本山岳会会議室　　［会　費］1,000円

「申し込」12／10迄に川口章子へ。電話＆fax 047-463-8721

［緑爽会 2012 年新年山行］

町田・自由民権と鎌倉古道を歩く（2万5千＝原町田）

［と　き］　1月14日（土）小田急線鶴川駅北口　9時集合

バス停0番から新袋橋までバスに乗車

［自由民権資料館］見学→［民権の森（小山）］を越えて、

［七国山（峠）切り通しと三等三角点］を探索。

薬師寺（薬師池公園）にお詣いりしてバスに乗り町田駅西口へ。

［カンボジア料理　アンコール・トム］042-726-7662 で新年会

SL 横山　隆　　CL 山口悠紀子

［申し込］1／10迄に山口へ。042-395-6563（fax）葉書も可

山口耀久さん
『北八ツ彷徨』を語る

緑爽会からお話がありましたが、私はいま、「山と渓谷」に連載した『アルプ』豊饒の時代」を仕上げるのに頭がいっぱいで、頭のスイッチの切り替えがうまくできません。今日、どういう話をするか、何も決めていません。皆さんがどんな話を聞きたいのか、ご希望があれば何でも正直に話します。

だいたい私は、多勢の方に向って話をするのは苦手なのです。不特定多数だと、山に関心があるとしても、特に山登りに詳しい方かどうかわかりません。話のポイントをどこに合わせていいのかがわかりません。今日、お集まりの方々は、山に関心があって私の本を読んでくださった方と、中にはそうでない方もいらっしゃると思いますが、一応読んでくださった方が多いと思って話をします。

私は今年、八五歳になります。一二歳のときに、初めて一人で小仏峠から景信山に登って高尾山の頂上に立ちました。その時から七〇年以上たっています。今では脊柱菅狭窄症という病気で足がしびれています。明日は皆さんと飯盛山に行きたいのは山々ですが、自信がないので止めておきます。

そんなわけで、最近の山の状態はよくわかりません。山ガールなんて話を聞きます(笑い)が、これまで山男という言葉はあったけれど、それも山ボーイになって、山もすっかり変わってしまったようですね。

私は、山登りというものは、日常性から切れたところから始まると思っています。今日は山川さんの車で来ましたが、車だと日常性を引きずって来てしまって、車から降りたところから非日常性は始まるわけです。昔なら、山の恰好をして登山靴をカチッカチッとならしながら新宿駅へ行った時から日常性とはパッと切れた。最近話題の山ガールっていうのは、スカートで山へ来るそうですね。下から来る人に見えてしまわないの？

――（発言）長いパッチみたいなのを穿いていますから。

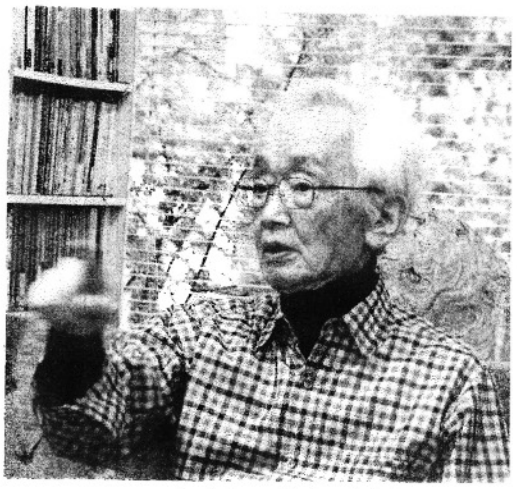
ふーん？（よくわからない。爆笑）　まあ、そんな心配をするくらい、私には最近の山を語る資格がないんです。

ところで、この中に去年、北杜市でした私の講演を聞いた方がいたら手を挙げてください。いない？　じゃあいいんだ（笑い）。

北杜市が何で私に話をもってきたのか、おかしいんだよね。僕は清里の悪口を書いているから（笑い）。清里は原宿だとまでは言わないけれど、登山者がルックザックを背負って行く場所じゃないなんてこきおろしている。それが北杜市で話をすることになって、せっかく八ヶ岳が見える所だし、あまり堅い話にしたくないから八ヶ岳の山名から話したのです。その話から行きましょうか。

八ヶ岳の「八」とは…

八ヶ岳については、『甲斐国誌』に、「峯巒岩嶂（ほうらんさくがく）として八葉に岐（わか）



山口さん　撮影　小泉義彦

る故に名とす」と書いてあります。『甲斐国誌』というのは、江戸時代に土地の話を集めて書き記したものですが、「八」というのが問題で、山梨側から見る八ヶ岳と信州側からみる八ヶ岳とは違うわけですよ。どれを数えて八つかわからない。深田久弥さんの『日本百名山』には、「八」というのは多数を現わすのだから、八という数にこだわる必要はないと書いてあります。

私は代表的な八峰として、編笠山、西岳、権現岳、赤岳、阿弥陀岳、横岳、硫黄岳、天狗岳をあげます。ただしこれを他人様に押し付ける気はありません。「八」を多数と考えるのは無難ですが、あえて数えてみたわけです。それでも何となくひっかかる。

「八」という数は聖数――聖なる数だと思います。伊勢神宮にあるのが三種の神器の八咫（やた）の鏡。八尺瓊（やさかに）の勾玉というのもありますね。神武天皇の東征のときに八咫鴉が出てきて案内します。これは三本足の鴉で、元は中国――太陽のなかに金のカラスがいるという伝説からきています。天武天皇の皇子、大津皇子が謀反の罪で自殺に追い込まれるとき「金烏（きんう　注・大陽）西舎に臨み鼓声短命を催（うなが）す」云々という言葉が「懐風藻」の中にあります。月にウサギがいると言うのも中国から来ていて、月のことは「玉兎」（ぎょくと）というのです。

『山名事典』によれば「八」はおめでたい数と書いてあります。私は「八」という数が先にあって、どこからみても八つぐらいあるから八ヶ岳となったと思っています。

一つには蓮華の花弁が八つあることからきているとも言う。富士山のことを芙蓉（注・ハスの花の別名）峰と言いますね。富士山の八つの峰とは、頂上を囲んだ形でしょう。高野山にも高野八峰があるけれど、高野山の頂上は平らですから、やはり周りを囲んだ形が蓮華というわけです。

結論を言いますと、「八」というのは、聖数であったということです。八股の大蛇だって、聖数が恐ろしいものに変わっていった例です。だいたい山には八丁が多いです。富士山の胸突き八丁、北沢峠の八丁坂、金峰山の手前の大日岳の登りには横八丁、縦八丁というのがあります。八丁というのは、ほかにも沢山あるはずですよ。

山の名前を勝手につけるな

私は山の名前を勝手につけるのは反対です。私が付けた、というよりやむを得ず付けざるを得なかったものがあります。横岳の西壁ね。あれは名前がないと、ルートを登っても説明ができないからね。第一尾根、第二尾根というと、尾根が多すぎて第一〇尾根くらいになってしまう。北岳バットレスだって第四、無理して第五まで数えるくらい。滝谷だって第四でしょ。横岳の西壁だけは、仕方がないから稜線の峰の名前を借りて、日ノ岳ルンゼとか石尊稜とか三叉峰ルンゼなどと付けました。

権現岳を下から見ると、前三ツ頭（前垂ともいう）というのがあるが、全然山ではない。上から見ても、下からみても傾斜が少しきつくなるだけ。それを過ぎると森林限界になって三ツ頭がある。三つの頭ではないのに、なんで三ツ頭なのか。それから権現岳に行く。

一方、編笠山から権現岳を目指すと、左から西岳の尾根が来て、権現岳の尾根とぶつかる。その交点をノロシバと言って、これは古い名前です。富士見町に乙事神社があって、そこに遺っている大きな古地図に書いてあります。その先がギボシです。ところが、測ってみると、権現岳にある標高点よりもギボシのほうが高いのです。困るのはギボシの下にある岩峰に名前がない。あの辺一帯を馬の背と言っているが、岩峰に名前がないから西ギボシと案内書に書いてしまった。だけど気が咎めてね（笑い）。今もガイドブックに載っているけれど、あれは私の責任です（笑い）。

ある地名を別なところに移した例は沢山ある。谷川岳だって昔は谷川の奥にある俎嵓（まないたぐら）のことを言ったのです。今はトマの耳とも、谷川富士とも言います。あんまり似ていないけど（笑い）。俎嵓から谷川岳を移してしまったわけだけど、皆さんが決めることだから西ギボシだって僕は一向に構わない。

さっきの三ツ頭だけど、麓から見ると権現岳と、ギボシと、僕のいう西ギボシで三つに見える。土地の人が「三ツ頭の権現様」と言うのを聞いたことがあります。今の三ツ頭は「前の三ツ頭」だったんじゃないかと推測しています。

八ヶ岳でいちばん場違いだと思うのはキレットという名前。キレットというのは、バーンと切れたところを言うんでしょ。代表的なのは穂高のキレットですね。

八ヶ岳のキレットは森林帯です。誰かがキレットと書いて、その後それが定着したんじゃないかと思います。ぼくも仕方がないからキレットと書くけど、あれはキレットじゃない。キレットのそばにツルネという小さな二つの頭があります。ツルネというのは吊り尾根のことでしょ。いわゆるキレットは、赤岳と権現岳の間の吊り尾根ですよね。それをいつ頃キレットと言ったのかと、昭和初期の登山案内書を調べたら出て来ました。

私は横着だし、あまり地名に深入りはしたくないですよ。虫がいい話だけど、誰かわかったら私に教えてください（笑い）。

尾崎喜八さんのこと

尾崎先生のことは『山頂への道』（二〇〇四年・平凡社刊）に載せています。

僕は尾崎さんの解説を四つ書きましたが、全部「君、書いてくれないか」と、尾崎先生から頼まれたものです。

最初に書いたのはぼくが二九歳のとき。三笠書房から出た『わが詩の流域』という本の解説です。今から言うと、本当に幼稚なものですが、二、三ヶ月かけて一生懸命書きました。今度『山頂への道』にそれを入れるときに、平凡社の編集担当者の首藤（憲彦）さんがズバリと言いましたよ。

「山口さん、それは取った方がいいですよ」

どうしてかと言ったら「下手ですよ」って。彼はしっかりしています。だけど僕は、これを書いたときに尾崎さんがとても喜んでくれて、「よく書いてくれた」と葉書をもらったんです。今も持っていますけれど。

尾崎さんは「暦程」の詩人です。そこで「尾崎喜八特集」を出す時にも、「書いてくれないか」と言われて「いま、ちょっと書けません」と言ったら、「じゃあ前に書いたのを使わせてもらうよ」と尾崎さんに言われました。

それを今度の私の本に入れるときに、取ったほうがいいと言われたわけ。それで僕は、幼稚で生硬だとは思うけれど評論というものを書いた最初の作品だから入れてくれと。そしたら、四つのうちの最初に入れるのはまずいからと、二番目に変えられてしまった（笑い）。

はっきり言って、尾崎さんのこと話すのは難しいんだよね。尾崎さんの切り口の一つとして戦争協力詩人ということがあります。

例えば、加藤周一さん。僕は加藤周一が好きなんですけど、あの人も「尾崎喜八はロマン・ロランを学んだのに、いったい何を学んだのか。こんなつまらない戦争詩を書いて」とこきおろしている。戦争中、たしかに尾崎喜八は戦争に協力した詩を書いています。それを攻撃する人が多い。が、中には的外れな

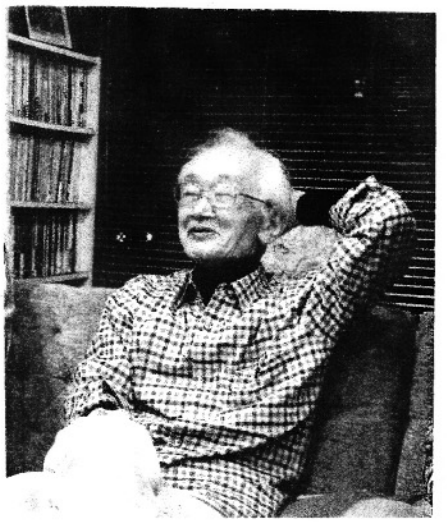
ものもある。

不思議なことに尾崎さんを好きな人に、反戦的な思想をもった人が多いのです。例えば鳥見迅彦。彼は社会主義者で、捕まって拷問をくらった詩人です。それが尾崎さんのファンだった。

それから串田孫一さんね。串田さんは、戦争中に師の渡辺一夫さんと二人で「腐儒瓦全」（腐った学者になっても瓦として全うする）と言って、戦争とは距離をおいた人です。瓦全の反対が、玉砕ですよ。アッツ島玉砕、マリアナ島玉砕、降参すればいいのに、戦陣訓で「生きて俘虜の辱めを受けるなかれ」と教育されているから降参しない。国際社会の通念として三分の一の人間が死んだら降参していいんですよ。日露戦争の旅順の戦いでステッセル将軍は降参したでしょう。ところが日本人は降参できないから玉砕する。玉と砕けろという時代に、瓦として全うしようと言い合った串田さんは反戦的だった。串田さんのように、今なら誇りをもってそう言える人たちの間に、意外と尾崎ファンが多いのです。

それでは僕はどうだったかと言えば、私は左翼ではない。右翼でも勿論ない。あえて言うなら今の世の中、右に寄っていますから、リベラル左派というところ。憲法「九条の会」の会員です。だけど私は、戦争詩人としての尾崎喜八を責める気はありません。尾崎さんは戦争が終ってから富士見に隠れています。戦争詩人としての自分を恥じた文章を残しています。

高村光太郎も三好達治も斎藤茂吉、折口信夫、倉田百三も同じ。文学者で協力しなかったのは、耽美派の連中だけでしょう。永井荷風や谷崎潤一郎が、いくら勇ましい詩を書いたって誰も奮い立たない。どうしても真面目な連中が書くことになる。彼らを責めることはできません。戦争を始めるときに、日本人はみんな戦争を支持したんですから。私だって愛国青年で陸軍士官学校を受けたんです、不合格でしたけど。



山口二等兵の敗戦体験

死ぬのが当たり前の時代でした。最後は兵隊です。この頃のことを話すとオクターブ高くなるからいやですね。

一つだけはっきりしていることは、八月一四日にポツダム宣言を受け入れて、一五日に玉音放送があって、日本は負けたわけですよ。ポツダム宣言が日本に渡されたのは、七月二六日。このときは「黙殺」した。新聞にはっきり「黙殺」と書いてあります。その理由は、これを受けいれたら国体が守れない、つまり天皇制が危ないというわけです。ポツダム宣言の最後に、これを選択しなければ徹底的な破壊あるべしと予告していた。もし、八月一五日でなく七月二六日に受け入れていたら原爆投下はなかったんです。最初のポツダム宣言から一二日後の八月六日に、広島の原爆で一四万の人が死んだ。その三日後には長崎で、七万人死んでいます。それを考えると、私がなんで生きているかと言うと、原爆のためなのですよ。そう言うと、「お前はアメリカの原爆を支持するのか」と言われるから言わないけれど。

その頃、私は本土決戦に備えて国内各地を転々としていました。海岸にタコ壺を掘って、中に爆弾をもって入って、敵が上陸したら戦車のキャタピラーに飛び込むことになっていたのです。どうせ死ぬんだったら、せめて東京に近い所で死にたいと願っていました。今でも中隊長の訓辞を覚えています。敵が上陸する前にジェネラルシャーマンというタンクがやってくるから、お前たちはそれに飛び込め。竿の先に爆弾をつけたって、戦車の後から火炎放射器をもった部隊がやってくるから、お前たちの大半はタコ壺のなかで焼き殺される。だから生きて爆薬を抱いてキャタピラーに飛び込めるのは、まだ幸せだと。陸軍は一億玉砕だと張り切っていたから、原爆が落ちなければとても収まらなかったね。

玉音放送があってからも、わが中隊はあくまで本土決戦すると言って中隊長は参謀本部に指令を受けに行った。その留守に班長が―この班長というのが、支那事変以来のつわものなの。だから若い中隊長のいうことなんか信用していない。自分がさんざん中国で略奪・強姦をやってきているから、アメリカ兵が東京にきたら女房が大変な目に合うと言って、中隊長がいない間に倉庫から米を持ち出して餅つきをやって解散してしまった（笑い）。

中隊長が帰ってきたら部下が誰もいない。頭に来て「山口一（本名・はじめ）は逃亡したから身柄を憲兵隊に引き渡せ」と町会長のところに通達が来た。町会長が私の家に来て「山口さん、町会の不名誉です」と言うんです。仕方がないから渋谷の大橋にあった憲兵隊に行って、「山口二等兵離隊逃亡の罪で収監してください」と言ったら、「馬鹿者！お前に食わせるメシなんかあるか。原隊に戻れ」というので、仕方なく鳥取県の米子の原隊まで行きました。そうしたら中隊長が、お前たちは帰ってきたからエライ。帰ってこないのが三分の一位いた。その連中は勇気があったと思うね。

中隊長が言うには、日本は戦争に負けて、賠償金を払う金がない。賠償金の代わりに、労働人口として外国に送られるだろう。そのとき、ブラックリストに載ったヤツは、真っ先にフィリピンに送られる。お前たちは、帰って来たから、離隊逃亡の廉により二十日間の営倉に処すって、二十日間ぶち込まれたことにしてそれでチャラになった。もし呼び出しがきたらと渡された「私は軍事裁判で罰を受けているので罪は消えています」という証明書を、今でも持っています（笑い）。

ついでに言うと、私の本名は山口一。それを病気した時に、お袋さんが拝み屋に言われて名前を変えた。最初は山口貴義。貴族の貴に忠義の義。偉そうな名前でいやだったんだけど、そのためにわざわざ富士見にお袋が来るというので変えちゃった。尾崎先生からの献呈本に山口貴義君と書いたのが残っています。退院して上諏訪の女房の家に遊びに行ったら、今度は耀久にしろと言って、また手紙が来た。貴義は病気がなおる名前で、耀久にすれば金が儲かると言ったんだけど、ぜんぜん効き目がないのですよ（大笑い）。

「北八ツ彷徨」について

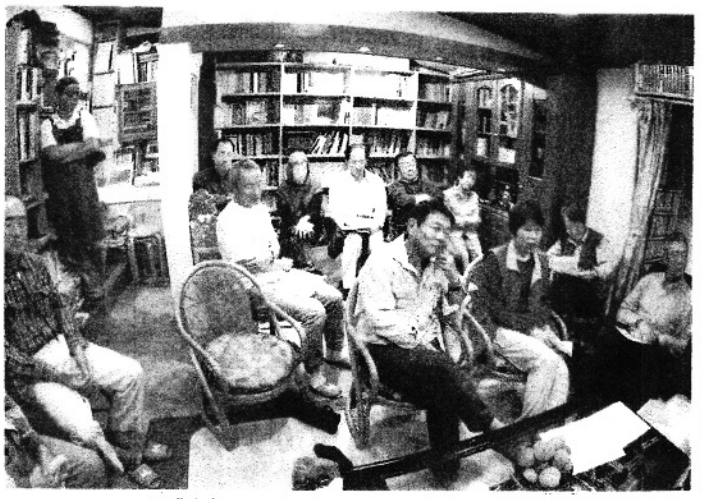
実はあの本は、あまり出す気はなかったんです。創文社で「アルプ選書」を出すというので、串田さんや尾崎さんほか何人かが集められたんですよ。その席で、私に八ヶ岳のことをまとめてくれと言われたんです。いつか本にしたい気はあったけれど、突然の話で、途中でまとめろといわれても気乗りしなかっ

た。そしたら帰りに尾崎先生から言われたんです。「これは一つのチャンスなのだから出しなさい」と。今も覚えているけど、お茶ノ水の駅でした。それでOKしたのです。

アルプ選書には、串田さんの『菫色の時間』畦地梅太郎『山の足音』渡辺兵力・高木正孝『垂直と水平の道』…。尾崎さんはヴァガールの『牧場の本』という翻訳を出しています。

私の本の内容としては、獨標登高会の会報に書いてきた「北八ツ日記」で半分くらい、「アルプ」やガイドブック（朋文堂マウンテンガイドブック『八ヶ岳』）に書いたものを集めれば一冊になる。ただし、創文社から注文が出て、新しく「富士見高原の思い出」を書けと言うんだ。これが構えちゃってね。僕にとって人生の転機になった時期のことだから、書かなくてはいけないと思うけれど、書けない。

その時、串田さんの『花火の見える家』という本があって、串田さんのことだからタッチが軽い。「よし、これで行こう」と思ったら気持ちが楽になってね。それで書き出したわけ。あれ、二ページくらいずつの章に分かれているでしょう。一日に軽く一章書けるんです。力余ってまだ書けるんだけれど、その日はそれで止めにして、翌日また書けるの。『北八ツ彷徨』を読み返して、あれが一番僕は好きです。苦労して書かなかったから。



甲斐大泉・ロッジ山旅にて　　撮影　小泉義彦

本の題名ですけれど、あれは苦しまぎれに付けたのです。「富士見高原の思い出」を書きあげて、原稿をそっくり持って創文社に行った。だけど、本の題名が決まらない。僕はさりげない題名にしたかったんで『冬の森』にすると言ったら、編集部の若い連中が『北八ツ彷徨』にしろと言うんだ。せっかく編集部が言うのなら『北八ツ彷徨』にしようかと考えなおしたわけ。結果的にはそうしてよかった。『冬の森』で出したら次は『春の森』を出さなきゃならない（笑い）。

久子夫人との出会い

富士見に行った頃、僕は恋愛をしたことがなかった。女も知らなかった。恋愛をしなければ人間は進歩しない。人生の勉強をするには、やはり恋愛をしなければと、わかってはいたけれど相手がいないから困っていたの。

そしたら現れたのが、同じ療養所にいた川上久子。僕が退院することになって、最後に二人で霧ヶ峰に行くことにして、そこで初めて接吻してしまった。だけど結婚する気はなかった。恋愛願望はあっても、結婚願望はないわけ。だって結婚するということは家庭を経営することでしょう。女房を食わせなきゃならないのに、こちらは職がないし、ババ付きだし。まるで条件が整っていなかったから、結婚なんてとても考えられなかった。

これまで出ていた健康保険が、二年たって切れてしまってね。医療保護を頼んだけれど、通るとは思えなかった。それで退院することにして、未払い金を清算しようとしたら五千円足りない。困って川上久子に相談したら、彼女が家から五千円持ち出して来て（笑い）、それで退院できた。その五千円が返せなくてね。結婚すれば帳消しになるというわけ。つまり僕は五千円で身請けされたんです（笑い）。

こんな話を『北八ツ彷徨』に書いたら生臭いし、笑い話になってしまうから、「富士見高原の思い出」では、きれいごとしか書かなかった。あれは青春の牧歌ですよ。

だいたい私はセンチメンタルなんです。一人で山に行くと、淋しくなって何となく涙がポロッとこぼれそうになる。感傷的な自分が恥ずかしくて人には言えない。だけど自分のセンチメンタルを殺すためには、一度それを書かなきゃいけないと思って書いたのが「岩小舎の記」。泣きたいくらい淋しかった、あれは本当のことです。だから僕自身はあの文章は嫌いなの。だけど、近藤信行さんが編纂した岩波文庫『山の旅』にはこれが載っている。自分がいいと思うものと、人がいいと思うものとはわかりませんねぇ。

――（発言）でも、『北八つ彷徨』は皆いいというじゃないですか。

自分では、『八ヶ岳挽歌』（二〇〇一年・平凡社刊）のほうが自信がある。『北八ツ彷徨』は歌ってしまっている。ことに「旅へのいざない」が。あの頃、夢中で読んだのがカミュなんかの実存主義文学です。散文は歌ってはいけないという気持ちがある。歌うような文章を書こうと思えば書ける。それを期待している読者があることも知っているけれど、僕はもう書かないつもり。本当の散文を書きたい。

深田久弥さんと、そんな話をしたことがあります。深田さんや尾崎さんは、そういう真面目な話をしてくれました。ところが串田さんは、三宅（修）君や大谷（一良）君に聞いてもテーマのあるはっきりした話はしてくれなかったと言いますね。

深田さんに「評論なんか書くとき、接続詞に苦労します」と言ったら、「君ね、スタンダールの文章は立っているよ」と言われた。それで前に深田さんが気に入ってくれた「八月」を読み直してみたら、接続詞を一つしか使っていなかった。行をどんどん変えていけば、接続詞をつかわなくても済むのです。評論的な文章は、接続詞がなかったら理論が固まりませんけれど。

『アルプ』のことを「山と渓谷」に連載するときには、手持ちの材料を膨らませながら書いた。膨らませて書くのはやさしいんですよ。資料が沢山あると、それをしぼって書くのにはエネルギーがいるの。だからあまり資料を集めすぎないほうがいいのね。いま、書いている武田（久吉）先生のことは、誰も書かないことを知り過ぎているので困っています。

聞きたいこと、あれこれ

――（発言）どうして『北八つ彷徨』から、次の『八ヶ岳挽歌』が出るまで四〇年もかかったのですか。

途中でいやになってサボっていたんです。今でも原稿が進まないのは、そのせいなの。『北八ツ彷徨』は自分の通過点に過ぎないと思っていた。そうしたら皆が騒ぐでしょう。そんな言い方したら悪いな。皆さんが買ってくださったでしょう。パートⅠとパートⅡの本があると、たいていⅡのほうがつまらない。例にあげちゃ悪いけど尾崎さんの本だって、『山の絵本』と『雲と草原』を比べたらダンチでしょう。『北八ツ彷徨』は気軽にやったけれど、パートⅡをそれより落とすのはいやだった。それがうまく行かなくてさぼっていた。

――（発言）それにしても、三年位したら続編をまとめると後書きに書いてあったのに、四〇年後

とは……

よく数えたら四一年なの。『北八ツ彷徨』（二〇〇一年・平凡社刊）も平凡社としては、他社がハードカバーで出した本を再度出すのは例がない。文庫本ならいいけれどと言われて、文庫ではいやだと言った。それなのに、よくやってくれました。ただ一つ、営業部から「定本」と入れさせてくれと言われましたよ。前例がないから「これは前のとは違う。これが定本だ」と入れさせてほしいと。

僕は自分の文章が気にいらなくなって、直すところが必ず出てくると言ったんです。そしたら、もう直っています、定本ですと（笑い）。

――（発言）それにしては、『山頂への道』は早くできましたね。すごくいい本です。『北八ツ彷徨』『八ヶ岳挽歌』と同じくらいいい本だと思います。

僕も『山頂への道』はいいと思っている。

――（発言）それなのに、どうして早くできたんですか。

わかないね。『北八ツ彷徨』は少し過大評価されているのよ。ただ、あれにはリリシズムがあるでしょ。それを意図的に排除してしまったから、『八ヶ岳挽歌』と『山頂への道』は読者にとってはどうかな。

――（発言）『八ヶ岳挽歌』というタイトルはどうしてついたのですか。

編集部の要望で、文章の一部から付けたんです。山仲間や山小屋の主人の死を悼む文もあるし、八ヶ岳の自然も失われたものが多い。全てが挽歌なんですよ。僕はね、自分では苦労して書いているけれど、読む人には軽く書いているように思わせたいの。

――（発言）これからのご予定は……

今やっている『アルプ』の仕事を早く仕上げて、今度は自分の山のことを書きたいです。

（記録　川口章子・近藤緑）

緑爽会&緑友 特別企画

「楢山節考」観劇と紅葉狩

一一月六日（日）に山梨県立文学館で劇団芸協が深沢七郎『楢山節考』を上演するというので、呼びかけたところ二〇人ほどの参加申し込みがあった。フォーラムIN以来の劇団との長いお付き合いと、映画にもなった「楢山節考」へのつよい関心があったと思われる。

昭和三一（一九五六）年、深沢七郎が「楢山節考」で中央公論新人賞をとったとき、文壇の大御所、正宗白鳥は「この作者は、この一作だけで足れりとしていいとさえ思っている」と、絶賛した。賞の審査をしたのは、伊藤整、武田泰淳、三島由紀夫の三氏。姨捨伝説をモチーフにしたこの小説を読んで三島由紀夫は「怖くて眠れなかった」と言ったという。

――楢山まつりが三度くりゃよ
　栗の種から花が咲く
　塩屋のおとりさん運がよい
　山へ行く日にゃ雪が降る

応募原稿には「楢山節」という民謡の楽譜が添えられていた。それが作者自身の作詞作曲であることも話題を呼んだ。

当時、深沢七郎は日劇ミュージックホールでギターを弾いていて、彼の小説の師はレビュー作家の丸尾長顕だった。これまでに愛読した小説は「椿姫」と「マノン・レスコー」だという新人の出現に世間の人は驚いた。型破りの作家、深沢七郎を「裸の大将」の画家山下清と同類のように扱った時期もあった。「東北の神武たち」「笛吹川」と書き進むにつれて、これまで誰も手をつけなかった日本の「土着」の世界を描く作家として注目を浴びるようになる。そして昭和三六（一九六一）年、日本の革命を描いた「風流夢譚」で、右翼に狙われる身となって、ギター一丁を背に放浪の旅に出る。帰ってからの七郎は、今川焼「夢屋」を始めたり、昭和六二（一九八七）年に七二歳で亡くなるまで、話題に事欠かない人だった。

深沢七郎は大正三（一九一四）年、山梨県の石和で生まれた。高校ラグビーで有名な日川高校（当時は日川中学）を卒業。バンカラ校でギターなど弾く生徒は、軟派で劣等生だったらしい。今度の企画展で、文壇の異端児もようやく故郷に還ることができたと言えよう。

観劇のついでに翌七日、紅葉狩をかねて姨捨に行く計画だったが、参加者の半数は懇親会がすむとその日のうちに帰京する人たちで、マイクロバスをチャーターするには人数が足りない。困っていたら、地元世話人の里見清子さんのお仲間たちが多数合流してくださった。更に信濃支部の方々のご協力もあって、姨連一行、無事姨捨山から生還することができた。

（近藤　緑）

姥石の上から見る冠着山（姥捨山）　写真提供　里見清子

『楢山節考』と現在の姨捨山周辺

信濃支部　**松林のり子**

一一月七日、日本山岳会緑爽会及び緑友の皆様には遠路、「楢山節考の姨捨伝説」への旅においで頂きましてありがとうございました。

当日はあいにく姨捨山とも言われる冠着山（かむりきやま）の山頂部分が雲におおわれ、本当に残念でした。一、二五二mのこの山はどこからもどっしりと形よろしく見え、更科山とも言われてこの地を鎮めるのに相応しい市民の山です。そしてこの真向いの鏡台山（きようだいさん）や有明山（ありあけやま）から出る月が棚田ごとに映ると言われ観光客が増えてきました。

高度成長期には小さな田を手作業で行なう米つくりが嫌われ放置されていましたが、平成八年頃より「ふるさと水と土保全モデル事業」として「棚田貸します制度」が始まり約二、〇〇〇枚の棚田が復活整備され、姨捨一帯の長楽寺も保存修理が行なわれ、とてもよい観光地となってきました。

日本の昔話によれば六〇歳になると、村内からこの大きな姨石の上に置いてゆかれ、その積み重ねが、この岩だとも言われました。映画『楢山節考』のとき、今村昌平監督を案内した私の友人によると、その撮影場所は小谷村の「真木」という限界集落だとのことでしたが。

さて、古今和歌集には「我が心慰めかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て」とでてきます。また大和物語には「…姨捨山とぞ言ひける…その前に冠山（こうぶりやま）とぞ言ひける」とあるそうです。「冠山」とは手力男命が天の岩戸を運ぶ途中、この山で冠をつけ直したと言われ「冠着山」と呼ばれるようにな

ったそうです。こうして国土地理院の地図には冠着山（姨捨山）と記載されるようになりました。

更にここから少し長野方面に行った所には「長谷寺」があり、古くはここは「小谷郷（おうなごう）」と呼ばれ、その中心であった長谷寺は「こはっせ」、「おはっせ」、「おばすて」と訛って姨捨山になったとも言われています。日本三長谷寺の一つなのです。

いずれにしても貧しかった大昔の伝説に胸が痛くなるのですが、この地を通った孝標の娘も芭蕉も書いた「更科」という郡名も合併により消えてしまいました。「姨捨」という地名だけが残るということは現代の私たちに対する一抹の警鐘かも知れませんね。

ご案内が拙く失礼しましたが、またのお越しをお待ちしております。（千曲市在住）

長楽寺境内にて　　撮影　狩野鉄作

錦秋、姨捨の旅

世話人　里見　清子

季節は紅葉シーズン真っ盛りの一一月七日、甲府からバスに乗り、車窓からの紅葉も長野に向かうにつれて色鮮やかになり、晴天ならば中央道から左に望む甲斐駒ケ岳、鳳凰三山はじめ南アルプスの山並みから右側には八ヶ岳を眺めての展望コース、泣き出しそうな曇り空から時々ぱらつく雨に沈みがちな気持ちを振り払って長野自動車道に入り、姨捨サービスエリアが近づく付近で冠着山（通称　姨捨山）を眺めたいのに上空は生憎の曇り空。杏の里で有名な更埴で高速道を下りて程なく信濃支部の松林のり子さんの待つ武水別神社に着いた。

姨捨駅周辺と姨捨観光会館付近の道路は下水道工事の最中で、千曲市役所から道路の工事区間を記された地図を取り寄せてあったが、大型車は迂回しなければならず地元松林さんの案内でスムースに進み、篠ノ井線姨捨駅から徒歩で姨捨観光会館に来ていた松本の田村佐喜子さんと合流した。観光会館とは食事時間の打ち合わせをすませ、天台宗の古刹で観月の名所として有名な方光院長楽寺の広い境内の拝観に移り、晴天なら岩の上から冠着山の見える大きな岩「姨岩」に登った。

この大岩は木ノ花開耶姫の姉で醜形で邪険だった大山姫が「信濃の国に月の澄める里あり、この月を眺むれば心慰められん」と或る人に勧められ、此処に辿り着いた時が仲秋の名月の頃だった。姨捨の里長楽寺に着いて大岩から月を眺め感動した大山姫は、邪険を詫びて大岩から身を投げたと伝えられている。大岩に登って善光寺平を眼下に、棚田を見下ろし、雲に隠れた冠着山を探したが残念ながら分厚い雲を払いのけることはできなかった。

大岩の脇には樹齢千年を越えても未だ若々しく茂っている桂の木もあって歴史は古く、芭蕉翁面影塚は松尾芭蕉が元禄元（一六八八）年更科紀行の折に訪れ「おもかげや姨ひとりなく月の友」の句を残し、昭和六（一七六九）年加舎白雄氏らによって面影塚が建立された。境内は石段を下り右手の観音堂、石段下には本堂に続く月見殿、姥岩、桂の木、祠、月見堂、芭蕉面影塚、句碑の多い境内から山門を潜り棚田に続く道が広がり、国の名勝重要文化的景観「姨捨の棚田」の一部を歩き、前方に広がる千曲川の流れと善光寺平を眺め、音に誘われ山間を走る篠ノ井線の列車を見て、振り返ると長楽寺に映える紅葉がとても素晴らしく、この季節ならではの景観に感動した。姨捨観光会館での昼食は、さすが更科蕎麦の名に恥じない味と好評だった。

午後は大雲寺を訪ねた。寺の周辺は自然探勝園に指定され、春は桜が咲き、夏には農業用水を兼ねた池にハスの花が咲いて見事な景観になる。八幡山大雲寺は天正九（一五八一）年の創建、石垣の上に建つ禅宗の落ち着いた雰囲気の寺で、境内の紅葉も見頃だった。

桑原宿跡の伴月楼はモミジが赤く色付き、見事な彩りで一時目を楽しませてくれた。幕末の志士佐久間象山ゆかりの地で佐野川温泉「竹林の湯　楓」は大人二五〇円、僅かな料金で温泉に入り、一日交流が得られることは地元の人々には格好の保養地であろうか。野菜とりんごの販売もしていたが、お目当ての信濃ゴールドがなかったので、番外でりんごの集荷所に向いバスが重くなるほど買い込んだ。

次は曹洞宗の古刹桑原山龍洞院に向かったが、左にレンガ造りの水路を見て僅かに進むと篠ノ井線の線路を潜るが高さ制限でバスはストップ。松原さんの車に乗る人と徒歩に別れてお寺に向かった。境内に立つと、八角観音堂が紅葉した木々に囲まれ、見事な調和で目に留まった。真新しい庫裏にあがってお茶をいただき、松林さんのお土産のお菓子が美味しかった。座敷から眺めたお庭の紅葉も見事だった。休憩後は往路と別の参道を通り、山門に続く石段の両脇には六体の地蔵が並び、石段を降りると頭の上に篠ノ井線の線路が走り、レンガ造りのトンネルを潜るところがあるが、折よく目の前に特急「しなの」号を見送り寺の入り口に下りた。

最終目的地は真言宗智山派で山号は金峰山、信濃長谷寺、長谷観音とも呼ばれ、本尊は十一面観世音菩薩、日本三長谷寺と言われ大和、鎌倉に続き三大長谷寺に数えられる。裏山に続く観音堂にもお参りして長谷寺に参拝後境内に戻り、参道を通って山門に続く石段を下りたところで解散となった。

今回の姨捨の旅では信濃支部の田村佐喜子さん、松林のり子さんには下見の時から本番まで大変お世話になりましたこと、心からお礼を申し上げます。（甲府市在住）

［参加者］田村佐喜子・近藤緑・里見清子・鳥橋祥子・樋口公臣・田井具世・川口章子・中尾千予光・渡辺恵美子・遠山若枝・松林のり子
飯田晴康・清野礼子・松野敦子・山澤直子・山澤夫佐子・狩野鉄作・近藤登喜子・中里律子・三枝海枝・小池興四郎・網倉佳子・荻原きよみ・金井百合子・滝見すみ子・天川菊江・根岸久枝・保坂征子・丸山恵子・村上泰久・望月誠子・小林さつき・古屋三四子　　計三三名

［編集後記］一二月・一月は合併号になります。「氷壁とその時代」の記録は次号に掲載します。それでは皆さま、よいお年をお迎え下さい。（K）